

とりたて詞の極性とフォーカス解釈

小林 亜希子

島根大学

【要旨】 本稿はとりたて詞「も」「は」の統語的・意味的特徴を説明する新しい分析を提出する。「も」は否定文、「は」は肯定文において生起位置にとどまることができないが、この事実は「も」「は」が異なる極性素性を持つと想定することで説明される。また、否定文において「も」と「は」が異なるスコープ読みを持つ事実もこの「極性」の考えによって説明できる。先行分析と異なり、本稿はとりたて詞をフォーカスではなく「新情報」のマーカースであると考え。これにより、とりたて詞の統語的・意味的特徴がある種の節では見られなくなるという「節の非対称」もうまく扱うことができる。本稿の議論はフォーカス解釈の一般理論にも修正を迫ることになる。フォーカスは必ず広いスコープ読みを持ち、いわゆる再構築は適用しないと主張する*。

キーワード：とりたて詞，極性，スコープ，節の非対称，再構築

1. とりたて詞「も」と「は」

日本語学で「とりたて詞」と呼ばれる助詞は、付加する句を新情報としてとりたてる。本稿は同類の「も」、対比の「は」の統語的・意味的特徴に注目する¹。次の例を見てみよう。

- (1) a. 花子は ケーキも 食べた。[前提：花子が(寿司)を食べた]
 b. 花子は ケーキは 食べた。[前提：花子が(寿司)を食べなかった]

いずれの例文でも「ケーキ」が新情報として取り立てられているが、前提(暗示)

* 本稿の執筆に際し、縄田裕幸氏、小原真子氏、佐々木淳氏から貴重な助言をいただいた。記して感謝したい。また、有益な指摘とコメントを下された2名の匿名査読者の方にもお礼を申し上げる。言うまでもなく、本稿におけるいかなる不備もその責任は筆者一人にある。

¹ 野田(1995)の分類によると、とりたて詞は (i) 比較系(「も」(同類), 「は」(対比)), (ii) 限定系(「だけ」「なら」「こそ」(特立), 「は」(主題), 「も」(柔らげ) など), (iii) 極限系(「ぐらい」「さえ」(意外) など), (iv) 従属節専用(「こそ」(譲歩), 「さえ」(最低限)) に分けられる。本稿が注目するのはこのうちの比較系のとりたて詞である。「も」「は」が「比較系のとりたて詞」というグループを構成することは、査読者よりご教示いただいた。

査読者から指摘されたとおり、対比の「は」と主題(トピック)の「は」は、統語的な性質が異なる (cf. Kuno 1973, Hoji 1985)。従って、主題の「は」は本稿の考察の対象外である。

² 「新情報」とは、発話の時点で会話参加者が共有していない(と話し手が見なす)情報のことである (cf. Jackendoff 1972)。Lambrecht (1994: 25) が指摘するとおり、新情報は命題との関係によって表される。例文(1a)を用いて説明すると、「も」は「ケーキ」をとりたてているが、「ケーキ」そのものが新情報なのではなく、「花子が α を食べた」ことが話題として取り上げられており(旧情報)、「 α 」の位置に「ケーキ」が入ることが新情報である。(従って、会話ですでに言及済みの事物が新情報を構成することもあり得る。)以降は簡潔さの便宜から

する情報が異なる^{2,3}。寺村 (1991) によると、「 α もP」は「 $P(\sim\alpha)$ 」を前提する。つまり、(1a) は「花子がケーキ以外の何か (例えば寿司) を食べた」ことを前提している。(議論の便宜上、「ケーキ以外の何か」は以降すべて“(寿司)”とする。) 対して、「 α はP」は「 $\sim P(\sim\alpha)$ 」を前提する。つまり、(1b) は「花子が(寿司) を食べなかった」ことを前提している⁴。こういった前提が存在しない (あるいは推察・復元できない) 談話内でとりたて詞を含む文が発せられると、「発話者の意図が分からない」(寺村 1991: 74)、おかしな文であると感じられる。

とりたて詞の意味・分類・文中での分布などについては日本語学の分野で詳細な研究が行われてきた (寺村 1991, 益岡他編 1995, 沼田 2000 など)。生成文法の枠組みでも, Kuroda (1965 [1979], 1969-70 [1992]) 以来, とりたて詞の意味解釈が多く研究者によって論じられてきた (Kato 1985, 外池 1989 など)。近年では Miyagawa (1997, 2005, 2007), Hasegawa (1991, 1994a, 2005), 長谷川 (1994b) らがとりたて詞の統語的特徴について新しい観察データを提出し, 説明を試みている。しかしながら, 彼(女)らの観察は断片的なものにとどまっており, その観察データに基づいた統語分析には経験論的, 理論的な問題が少なからずある。本稿は, より広範なデータ観察に基づいてそれらのデータを統一的・原理的に説明できる分析を提出する。

本稿の構成は以下のとおりである。まず第2節で、「も」「は」の統語論・意味論を扱った先行研究を概観する。そこで提案された分析を支持するものとして彼(女)らが提出したデータを紹介するとともに, それらの分析にとって問題となる新たな

「ケーキ」が新情報である」のように記述するが, 厳密には上のおりの意味である。

文が発話されるや否や, その文の「新情報」は「旧情報」に変わる。ただし第3節で述べるように, 本稿は情報の新旧が段階的 (gradable) であると考えられる。

³ 本稿では「前提」と「暗示」を区別せずに用いる。「前提」が談話の中に実在しないのに話し手が前提を必要とする文を発することはあり得る。その場合, 聞き手はそのような前提があるとの「見なし」をして発話文を解釈する (Kuroda 1965 [1979], Stalnaker 1973)。逆に言えば, 話し手は聞き手の「見なし」を期待して, 前提が実在しなくても (1a, b) のような文を発することができる。その場合の前提は「暗示」・「含み」という形で聞き手に提示されると言える。前提が文字どおりの「前提」として実在するのか, 「暗示」として示されているのかは, とりたてやフォーカスの解釈・統語的ふるまいに影響しない。多くの先行研究が採用している用語法に従って「前提」と表記するが, 「暗示」と読み替えても構わない。

⁴ 正確に言うと, 「 α も/はP」のとりたての範囲は, α を先頭, 動詞を最終要素とする構成素にまで拡張できる (沼田・徐 1995)。例えば, 例文 (1a, b) のとりたて詞は下に示すように動詞句 (VP) 「ケーキを食べ(る)」をとりたてる解釈も可能である。(例文は査読者から提供されたものを改変した。)

- (i) a. (お酒を飲んだだけでなく,) 花子は ケーキも 食べた。
[前提: 花子が (お酒を飲んだ) だ]
b. (お酒を飲まなかったけれど,) 花子は ケーキは 食べた。
[前提: 花子が (お酒を飲ま) なかった]

ここでは、「お酒を飲む」と「ケーキを食べる」が「同類」の事態と見なされている。しかし, Kuroda (1965 [1979]), 寺村 (1991), 沼田・徐 (1995), Shudo (2002) などが指摘するとおり, この「見なし」がいかにか得られるのか説明することは容易でない。本稿ではとりたて範囲の拡張がないケースのみを扱うことにする。

データの存在を指摘し、「も」「は」の統語的・意味的特徴をより正確な形で一般化する。第3節では新たな分析を提案する。続く2つの節で、提案された分析を用いて関係データを説明する。第6節でとりたて詞の研究を複雑にしている再構築の問題について簡潔に考察し、第7節で論をまとめる。

2. 「も」と「は」の統語的・意味的特徴、先行分析とその問題点

2.1. 「も」「は」の移動とスコープ解釈

2.1.1. Miyagawa (1997, 2005, 2007), Hasegawa (1994a, 2005)

Miyagawa (1997) は次の例より、対比の「は」が動詞句 (vP) にとどまれないと論じる。

- (2) a.?? ジョンが [_{vP} 急いで 本は 買った] た。
 b. ジョンが 本は₁ [_{vP} 急いで _t 買った] た。(Miyagawa (1997:10) より改変)

様態を表す副詞的表現は vP 付加位置を占めると前提すると (Pollock 1989), それに後続する要素は vP 内部にあることになる。例文 (2a) と (2b) の容認度の違いは、対比の「は」が vP 内にとどまれないことを示している。Miyagawa (1997) は、「は」が vP 外にフォーカス移動していると論じる。

同様の主張が、「も」に関して Miyagawa (2005, 2007), Hasegawa (2005) でなされている。ただし、その主張のもととなるデータの種類は異なり、「も」と「ない」のスコープ関係を根拠とする。

- (3) a. ジョンも 来なかった。
 b. ジョンが 本も 買わなかった。 [も > ない, *ない > も]
 (Hasegawa 1991: 279)
- (4) a. 花子は ケーキも 食べなかった。 [も > ない, *ない > も]
 b. 花子は ケーキも₁ [_{PolP} [_{vP} _t 食べ] なかつ] た

例文 (4a) は「花子が (寿司) を食べなかった」ことを前提する。前提の中に否定が含まれているので、「ない」の方が「も」よりも狭いスコープを取っていると言える。この「も > ない」のスコープ読みが義務的であることから、Miyagawa, Hasegawa は、「も」は (4b) に示すように「ない」よりも上位に義務的に移動すると主張する⁵。

⁵ Miyagawa (2007) は、次の例を「も」の移動を支持するもう一つの証拠として挙げる。

- (i) a. 腰を₁ 太郎が _t₁ 下ろした ベンチ
 b. ???腰を₁ 太郎も _t₁ 下ろした ベンチ (Miyagawa 2007: 54)

Miyagawa によると、慣用句の一部 (idiom chunk) である「腰を」は、(ia) では SPEC-T に A- 移動するため合法的である。(ib) が容認されないのは、「太郎も」が義務的に SPEC-T へフォーカス移動することによって「腰を」が A- 移動できなくなるためであるという。

しかしながら、この非対称の原因が「も」の義務的移動であると断言するのは性急であると思われる。(ia, b) では関係節がデータに使われているが、主節で同様の例文を作ってみる。

- (ii) a. ???腰を₁ 太郎が ベンチに _t₁ 下ろした。
 b. ???腰を₁ 太郎も ベンチに _t₁ 下ろした。

以上の議論を見ると、「は」「も」いずれのとりたて詞もフォーカスの性質を持ち、フォーカス移動するように思われる。しかしながら、次の例を見ると「も」と「は」のふるまいは大きく異なることが分かる。

- (5) a.?? 花子は [vP 箸で ケーキは 食べ] た。
 (→ (a') 花子はケーキは箸で食べた。)
- b. 花子は [vP 箸で ケーキも 食べ] た。
- (6) a. 花子は [PolP [vP 箸で ケーキは 食べ] なかつ] た。
 b.?? 花子は [PolP [vP 箸で ケーキも 食べ] なかつ] た。
 (→ (b') 花子はケーキも箸で食べなかった。)
- (7) a. 花子は ケーキは 食べなかつ た。
 [前提: 花子が(寿司)を 食べた。] [ない > は]
- b. 花子は ケーキも 食べなかつ た。(= (4a))
 [前提: 花子が(寿司)を 食べなかつ た。] [も > ない]

(5a) と (6a) の対比から、「は」の移動は肯定文においてのみ義務的であることが分かる。興味深いことに、「も」はそれと反対で、否定文においてのみ義務的に移動する ((5b), (6b))。さらに、(7a, b) の前提の対比から分かるように、「も」は「ない」よりも広いスコープを取るが、「は」は逆に「ない」よりも狭いスコープを取る。

とりたて詞「も」と「は」はこのように異なる特徴を持つため、どちらか一方の特徴だけを観察して「日本語のフォーカスの特徴」のような一般化を行うことには明らかに問題がある。しかしながら、Miyagawa (2005, 2007), Hasegawa (2005) は実質的に「も」(と、それと似たふるまいをするととりたて詞) の観察のみに基づいて概略 (8a-c) のような分析を提出した。

- (8) a. 日本語はフォーカス言語である。具体的には、T が [focus] [EPP] 素性を持ち、フォーカス句を顕在的に SPEC-T に誘引する。
 b. 「も」は [focus] 素性を持つため、義務的に SPEC-T に移動する。
 c. フォーカス移動は再構築できないため、「ない」よりも広いスコープを取る⁶。

(iii) a. 腰を₁ 太郎が_{t₁} 下ろした。

b. 腰を₁ 太郎も_{t₁} 下ろした。

Miyagawa の分析が正しければ、「も」を越えて idiom chunk が移動する (iib), (iiib) だけが非文法的になるはずである。しかし実際には、移動の可否に「も」のあるなしは関わらない。(ia, b) の容認度の差が生じる原因は明らかでないが、Miyagawa のデータ観察は十分ではないことが分かる。少なくとも (ia, b) を「も」の移動の証拠と見なすことはできない。

⁶ 再構築できない理由はいろいろ提案されている。Miyagawa (2005, 2007) は、一致 (Agree) のある A- 移動のみが再構築可能であるとしている。Hasegawa (1994a) は、全体的経済性 (global economy) の観点から、一旦移動したスコープ要素は移動位置でスコープ解釈されねばならないと論じる。また、Hasegawa (2005) では、探査要素 (probe) の EPP 素性を満たすための移動は再構築の対象にならないとしている。

この分析は、「も」が肯定文では移動しない事実 ((5b)) と反する。また、同じくとりたて詞に分類される「も」と「は」が異なる統語的・意味的特徴を示すことも説明できない。

(8c) は、フォーカスの一般理論と整合しないという点でも問題がある。フォーカスと否定が共起すると、むしろ解釈は多義的になると言われる。このことは、英語をデータとするフォーカス研究でしばしば指摘されてきた (Jackendoff 1972, Akmajian 1979, Herburger 2000 など) が、日本語でも同様の事実が観察されるという (Kato 1985)。例文 (9), (10) はいずれも A, B に示す 2 とおりのスコープ解釈が可能である。

(9) FRED doesn't write poetry in the garden.

A. It is Fred who doesn't write poetry in the garden. [Fred > not]

B. It isn't Fred who writes poetry in the garden. [not > Fred]

(Jackendoff 1972: 259)

(10) ユウジは デザート を 食べませんでした。

A. 「ユウジは 何を 食べませんでしたか？」 「——」 [デザート > ない]

B. 「ユウジは 何を 食べましたか？」 「——」 [ない > デザート]

(Kato (1985: 74-75) より改変)

(10A) の文脈では、何かについて「ユウジが x を食べなかった」ことが前提され、フォーカス「デザート」がその x に同定される。(10B) では逆に、何かについて「ユウジが x を食べた」ことが前提となるが、その x を「デザート」に同定することが否定される。

(9), (10) のフォーカスは「同定的 (identificational)」, すなわち前提に不定語 (“x”) が含まれ、その内容をフォーカスが明らかにする (“x = デザート”)⁷。とりたて詞の解釈は (1a, b) に示したようにそれとは異なり、前提には特定の要素 (“(寿司)”) が含まれ、別の情報 (“ケーキ”) が新たに追加され「比較」されることでとりたての効果を得られる。このような違いはあるものの、フォーカスと否定のスコープ関係を「再構築」のような統語操作によって説明しようとするならば、(i) 同定的フォーカスは自由に再構築できる、(ii) 「も」は再構築できない、(iii) 「は」は義務的に再構築される、などと言わねばならないことになるだろう。それがなぜかを原理的に説明できない限り、(8c) の提案は経験論的にも理論的にも問題があると言わざるを得ない。

2.1.2. Kato (1985)

Kato (1985) は日本語否定文を分析した研究であるが、その中にフォーカスと否定のスコープ関係を扱った箇所がある。彼によると、(9), (10) の多義性は、否定

⁷ (9B), (10B) タイプのフォーカス解釈については第 5 節で修正する。

(*not*, 「ない」) が前提・フォーカスいずれをスコープに取ってもよいことを示している。ただし、語彙的フォーカス(とりたて詞など)には否定のスコープを指定するものがある。「も」は、「ない」が狭いスコープをとることを指定し、「は」は逆に、「ない」が広いスコープを取ることを指定する。ゆえに(7a, b)の解釈が義務的となる。

この分析は、データ観察をそのままルール化したにすぎず、また(5), (6)に見られる「も」「は」の統語的特徴も扱えない。さらに、次の例に見るような「節の非対称」も扱うことができない(これは前節の分析も同様である)。非文法的な(5a), (6b)を、理由を表す「～ので」節に埋め込んだものがそれぞれ(11a), (11b)であるが、ある種の従属節では文法性が改善することが分かる。

- (11) a. [花子が [_{VP} 箸で ケーキは 食べ] たので], 太郎は彼女がふざけていることにやっと気がついた。
[前提: ?]
- b. [花子が [_{PolP} [_{VP} 箸で ケーキも 食べ] なかつ] たので], 太郎は驚いた。
[前提: 花子は何でも箸で食べる。しかし今日、彼女は箸で(寿司)を食べたが…] [ない > も]

Kato 分析にとって問題なのは、(11b)ではむしろ「ない > も」の解釈が義務的となる事実である。つまり、この場合前提されるのは「花子が箸で(寿司)を食べた」ことであり、「花子が食べたもの」の集合に「ケーキ」を追加する、という断定部分が否定されるのである。「ない」は「も」よりも狭いスコープを取るべし」というルールでは(11b)のスコープ解釈を説明することができない。

2.2. 節の非対称: Hasegawa (1991), 長谷川 (1994b)

「も」と「ない」のスコープ解釈に関して節の非対称があることは沼田・徐(1995)にも言及があるが、単なる事実の指摘にとどまっている。管見では唯一、Hasegawa(1991), 長谷川(1994b)が説明を試みている。Hasegawaは、疑問文および条件節に「も」と「ない」が現れると多義的解釈が可能になることを観察している。例として(12b, c)を挙げる。

- (12) a. ジョンが 本も 買わなかった。 [も > ない, *ない > も]
b. ジョンが 本も 買わなかったか。 [も > ない, ない > も]
c. ジョンが 本も 買わないと困る。 [も > ない, ない > も]

(Hasegawa 1991: 279-280)

(12a)では「も > ない」読みしかできない。すなわち、特定の何かについて「ジョンがxを買わなかった」ことが前提され、本についても同じことが当てはまることが断定される。逆のスコープ解釈、すなわち、特定の何かについて「ジョンがxを買った」ことが前提されるが、本については同じことが当てはまらない、という解釈は許されない。しかし、(12b, c)ではいずれのスコープ解釈も可能である。

「も > ない」読みが得られるプロセスは (8a-c) のとおりであるが、逆のスコープ読みは以下のように説明される。疑問節や条件節の C は Infi を繰り上げる素性を随意的に持つ。その場合、Infi に付加している否定辞「ない」もともに「も」より高い位置に動くため、広いスコープを取る。

しかしながら、この分析にはいくつかの問題がある。まず、Infi を誘引するという C の素性の正体が不明である。「条件」のような文の意味タイプに関わる素性が誘引すると考えると (長谷川 1994b), 「随意的」であるという想定と矛盾する。意味的に空でない C は全て Infi を誘引できると考えると (Hasegawa 1991: note 8), 誘引の原因はさらに不明瞭になる。また、Chomsky (2007, 2008) によると、すべての C は節のタイプを決定する働きを持ち、Infi に然るべき素性を継承させる。これが正しければ、全ての節の C は「意味的に空」でないはずである。

経験論的な問題もある。第一に、どういう文で多義的解釈が得られるのか十分な観察がなされていない。疑問文と条件節は Hasegawa の論文では例示に過ぎない。分析を提案する前に、説明すべきデータの範囲を正確に定めておく必要がある。第二に、Hasegawa の分析だと (11b) に「ない > も」読みがあることは予測できるが、「も > ない」読みがないことは予測できず、この点も問題である。Hasegawa 分析では、「も」は常に (顕在的または隠在的に) Infi よりも上位に動く。一方、Infi (+ない) の繰り上げは随意的である。よって、Infi 繰り上げが起こらない場合は「も > ない」読みが得られると予測してしまうことになる。

2.3. 節の非対称：より正確な一般化

「も」「ない」が主節にあると、「も > ない」読みが義務的である。しかし、疑問文およびある種の従属節では多義的解釈が許される。この「節の非対称」は先行研究にすでに言及があるのだが、次の2つの点で記述的問題のあることが明らかになった。

- (13) a. 常に多義的になるわけではなく、多義的になる場合と、「ない > も」解釈が義務的になる場合がある (e.g. (12b,c) vs. (11b)).
 b. 多義的解釈を許す節の種類 (性質) が不明である。

本節では、これらの点についてより正確な記述的一般化を行う。なお、節の非対称に関しては「も」のみを考察の対象とする。従属節では「は」の対比のニュアンスが希薄になるように筆者には思われるからである。例えば (11a) は、「花子が箸で (寿司) を食べなかった」のような前提が特になくても使われ得ると感じられる。この「は」が主節と同様に「対比」を表しているのかも含めて現時点では不明である。「は」に関する節の非対称は今後の研究課題としたい。

また、疑問文は、疑問のオペレータがとりたて詞の解釈に影響するため別に論じる必要がある。これに関しては 4.3 節で論じることにする。

2.3.1. 多義的スコープ解釈とは何か

まず, (13a) の問題を考える。例文 (11b) ((14a) として再掲) と (14b) における「も」「ない」の可能なスコープ関係を比べてみよう。

- (14) a. [花子が _{[PolP [vP 箸で ケーキも 食べ]} なかつ] たので, 太郎は驚いた。
 [前提: 今日, 花子は箸で (寿司) を食べたが…] [ない > も]
 b. [花子が ケーキも₁ [_{[PolP [vP 箸で _{t1} 食べ]} なかつ] たので], 太郎は驚いた。
 A. [前提: 今日, 花子は箸で (寿司) を食べなかった上に…] [も > ない]
 B. [前提: 今日, 花子は箸で (寿司) を食べたが…] [ない > も]

従属節において「も」「ない」のスコープ解釈は多義的になるのではなく、統語的階層関係を反映した解釈となることが分かる。(14a) の「ケーキも」は vP 内にとどまっているため、否定辞「ない」よりも下位の階層関係にある。この場合は「ない」が必ず広いスコープを取る。一方, (14b) のように「ケーキも」が「ない」よりも上位に移動していれば、「も > ない」「ない > も」いずれのスコープ解釈も可能である。移動の痕跡 (コピー) が意味解釈にアクセスできるのならば、再構築とは痕跡が関わる解釈である (Chomsky 2008: 146, 155–156)。(14b) の場合、「ケーキも」が移動位置で解釈されれば「ない」よりも広いスコープ、痕跡位置で解釈されれば狭いスコープ読みになる。つまり、従属節においては「も」の再構築が可能だと分かる。

以上の議論より、「も」と「ない」のスコープ解釈に関するより正確な一般化は次のようになる。

- (15) a. 主節では「も > ない」読みが義務的である⁸。
 b. ある種の従属節では、「も」と「ない」の統語関係を反映したスコープ解釈となる。

2.3.2. 多義的スコープ解釈を許す従属節とは何か

続いて (13b) の問題を考えよう。ここまで、「条件」「理由」を表す従属節では多義的解釈が可能であることを見た ((12c), (14b))。しかしながら、どのような従属節でも多義的解釈を許すわけではない。実際 Hasegawa (2005) は次の例から全く逆の一般化をしている。「こと」を付けても付けなくても「も > ない」読みしか得られないことから、主節と同じく従属節でも可能なスコープ解釈は「も > ない」のみであるというのである。

- (16) 花子も そのテストを 受けなかったこと [も > ない] (Hasegawa 2005: 66)

しかし、単に「こと」を付けただけのデータから従属節についての一般化を行うことは適切でない。Kuroda (2005: 21–22) によると、「こと」節には断定的な (state-

⁸ 主節でも逆のスコープ解釈ができる場合がある。これについては 4.3 節で扱う。

making) 用法と非断定的な用法がある。Heycock (2008) も指摘するとおり、前者は主節に近い性質を持つ。これが正しければ、(16) は「従属節」の例として適切でないのかもしれない。

すでに見たとおり、ある種の従属節においては「も」の多義的解釈が可能である。本研究では、「も」と「ない」を含むさまざまな従属節を作り、どのような節で多義的解釈が可能となるのかを調査した。結論から述べると、得られた結果より (15) は次のように修正される。

- (17) a. トピックを持つ節では「も > ない」読みが義務的である。
 b. トピックを持たない節では「も」と「ない」の統語関係を反映したスコープ解釈となる。ただし、補部節は例外で、「も > ない」読みが義務的である。

以下、(17) がどのように導出されるのか示していく。

まず、トピックを持てる従属節と持てない従属節を分類する。以下は南 (1974) による従属節の分類を参考に、適宜修正・追加を行ったものである⁹。(19) のアスタリスク (*) は、トピック解釈の欠如を表す。

- (18) トピックを随意的に持つ従属節
- a. 補部節「～と」¹⁰
 太郎は [先生{は・が} すぐに怒ると] 思っている。
 - b. 断定的な「～こと」節¹¹
 太郎は [先生{は・が} すぐに怒ること]-を知っている。
 - c. 順接の「～て」(または連用形) 節
 [先生{は・が} 機嫌が悪く] みんなもそれに気づいている。
 - d. 文頭にある逆接・譲歩節「～が、～けれど、～のに」
 [先生{は・が} 怒ったけれど] 太郎は黙らなかつた。
 - e. 文頭にある非過去時制の理由節「～から、～ので」
 [先生{は・が} すぐに怒るから] みんな何も言えない。

⁹ 南は、主節への従属度の強さに従って従属節を A, B, C 類に分類する。A, B 類の従属節はトピックを含むことができないが、C 類はそれが可能である。ただし、この分類には「トピックを含むことができるかどうか」以外の基準も考慮されている。また、南には言及がないが、従属節の文中に占める位置やその時制もトピックの可否に影響を及ぼすようである。よって、以下の分類では南の分類はあくまでも参考とし、トピックの可否のみによって従属節を二分した。なお、A 類従属節は考察の対象外である。この節は否定辞を含むことができないので、「も」と「ない」のスコープ関係を調べられないからである。

¹⁰ Kuroda (2005: 19) の “non-factive complement” に当たる。

¹¹ (18b), (19a) いずれの「～こと」節も叙実述語の項であるが、Kuroda (2005: 20) によると、前者の述語のみ断定的 (state-making) 文脈を提供し、「～こと」節がトピックを取ることを可能にする。

- (19) トピックを持つことができない従属節
- a. 非断定的な「～こと」節
[太郎[*は・が] 授業中にしゃべったこと]-を 先生は残念に思った。
 - b. 目的節「～ように」
[太郎[*は・が] 反省するように] 先生は注意せねばならない。
 - c. 条件「～たら、～ても、～なら、～ば、～と」
[先生[*は・が] 注意したら] 太郎はきっと黙る。
 - d. 継起・並列的な「～て」（または連用形）節
[先生[*は・が] 注意して] やっと太郎は黙った。
 - e. 主節要素に後続する譲歩節「～が、～けれど、～のに」
太郎は [先生[*は・が] 怒ったのに] 黙らなかった。
 - f. 主節要素に後続する、または過去時制の理由節「～から、～ので」
みんな、[先生[*は・が] すぐに 怒るから] 何も言えない。
[先生[*は・が] 怒ったから] みんな何も言えなくなった。
 - g. 関係節
[先生[*は・が] 注意した] 学生

まず、(18) タイプの従属節に「も」と「ない」を含ませ、そのスコープ解釈を考えてみよう。

- (20) a. 太郎は [花子{は・が} ケーキも 食べなかったと] 思っている。
b. 太郎は [花子{は・が} ケーキも 食べなかったこと]-を知っている。
c. [花子{は・が} ケーキも 食べず] みんなもそれに気づいている。
d. [花子{は・が} ケーキも 食べなかったけれど] 太郎は気にしなかった。
e. [花子{は・が} ケーキも 食べないから] みんな心配している。

従属節の主語が「花子は」となってトピックを持つ場合は、いずれの例文においても「も > ない」読みしかできない ((17a))。一方、主語が「花子が」となってトピックを持たない場合はやや複雑である。まず、(20a) ではやはり「も > ない」読みしか得られない。しかし、(20b-d) では「ない > も」読みも可能である ((17b))。

なお、トピックのあるなしは「も」の占める統語位置の制約にも関わる。(21a) のとおり、トピックを持つ従属節（否定文）では、「も」はvPの中にとどまれない。一方、(21b) のようにトピックを持たない従属節では「も」がvP内にとどまってよい。

- (21) a.??太郎は [花子は [vP 箸で ケーキも 食べ] なかったこと]-を知っている。
b. 太郎は [花子が [vP 箸で ケーキも 食べ] なかったこと]-を知っている。
[ない > も]

(20a) はこの点についても例外的である。次の例が表すように、トピックのあるなしに関わらず、「も」が否定文でvPの中にとどまることはできない。

(22) ?? 太郎は [花子{が・は} [vP 箸で ケーキも 食べ] なかったと] 思っている。

次に、(19) タイプの従属節に「も」と「ない」を含ませ、そのスコープ解釈を考えてみる。

- (23) a. [花子が ケーキも 食べなかったこと]-を 太郎は残念に思った。
 b. [花子が ケーキも 食べないように] 太郎は見張っていた。
 c. [花子が ケーキも 食べないなら] 太郎は驚くだろう。
 d. [花子が ケーキも 食べず] ケーキは最後までお皿に残ったままになった。
 e. 太郎は [花子が ケーキも 食べなかったのに] 大して驚きもしなかった。
 f. [花子が ケーキも 食べなかったので] 太郎は驚いた。
 g. [花子が ケーキも 食べなかった] パーティ

(23a-f) では多義的解釈が許される。ただし関係節 (23g) については、両方の解釈を認める人、「も > ない」解釈しか許さない人があり、個人差が観察された。どのような要因が容認度の幅を生んでいるのか現時点では不明である。判断を確定できない以上、関係節は今回の考察の対象から外すことにしたい。

否定文での「も」の位置であるが、次の例に示すとおり、このタイプの従属節では「も」句が vP 内にとどまることができる。

(24) [花子が [vP 箸で ケーキも 食べ] なかったこと]-を 太郎は残念に思った。
 [ない > も]

ここまでの観察から、トピックを持たない節では「も」の統語的・意味的制約がなくなるのだが、「～と」節が例外となることが分かった。それでは、「～と」節は他の節とどう異なるのであろうか。述語の項であるという点では「～と」節 (18a) と「～こと」節 (18b), (19a) は同じである。しかし、後者は叙実述語の項であるという点が異なる。大庭 (1998), Kayne (2008) によると、叙実述語の項はその指定部 (あるいは付加) 位置に現れる。また、(18), (19) のその他の従属節は付加詞 (あるいは等位節) の位置に生起する。つまり、「～と」節とその他の従属節は、補部節か否かの点で異なると言える。以上の観察から (17b) のただし書きが得られる。

ちなみに、(17) は従属節のみならず主節にも当てはまる。主節は必ずトピックを持つので (Heycock 1993, 2008), (17a) の状況に相当し、常に「も」に統語的・意味的制約がかかる。主節が必ずトピックを持つことは、トピックのない次の (25a) が容認されないことから支持される¹²。

- (25) a. ?? 太郎が まじめだ。
 b. あっ、太郎が 来た。

(25b) のように一見トピックのない文もあるが、一時的な状況を表す述語 (stage-level

¹²「太郎が」が総記の解釈を持てば容認される。ただしその場合、「まじめだ」がトピックになっている (「まじめなのは太郎だ」)。

predicate) の文に限られる (Kuno 1973)。Heycock (2008), Tomioka (2007) によると、その場合には音形ゼロのトピックがあるという。このタイプの述語は音形ゼロの時空間 (Davidsonian) 項を取り、それをトピックにできるため、一見トピックのない文が現れるのである。

主節と異なり、従属節のトピックは随意的である。(18) タイプの従属節に (25a) を埋め込んでみると、次の例が示すとおり問題なく容認される。

- (26) a. 花子は [太郎が まじめだと] 思っている。
 b. 花子は [太郎が まじめであること]-を 知っている。

音形ゼロの時空間項は利用できないので、(26a, b) の従属節にはトピックがないことになる。

まとめると、主節・従属節に関係なく、トピックを持つ節では「も」に統語的・意味的制約がかかり、持たない節では制約がかからない。主節は必ずトピックを持つので、「も」に常に制約がかかる。従属節については、随意的にトピックを持つ場合に限り「も」に制約がかかる。ただし、補部節は例外で、常に制約がかかる。「も」の制約が消える節を、これまで「ある種の従属節」と呼んできたが、より正確にはトピックを持たない、補部節以外の節であるということになる。

2.4. まとめ：説明されるべき事実

以上の議論をまとめると、とりたてて詞「も」「は」には次のような特徴がある。これらが統一的・原理的に説明できる分析を以下で提出したい。

- (27) 「も」と「は」の非対称：
 a. 「も」：否定文では vP 内にとどまれない。「も > ない」読みが義務的である。((5b)-(7b))
 b. 「は」：肯定文では vP 内にとどまれない。「ない > は」読みが義務的である。((5a)-(7a))
- (28) 節の非対称（「も」の場合のみ）：
 a. トピックを持つ節では、「も」に (27a) の制約がかかる。((20), (21))
 b. トピックを持たない節では、(27a) の制約がない。ただし、補部節は例外で、トピックを持たなくても制約がかかる。((20), (23), (24), (22))
- (29) フォーカスの非対称：
 とりたてて詞と異なり、同定的フォーカスが否定文に現れると多義的になる。((9), (10))

3. 提案

この節では、次節からのデータ説明に必要な統語・意味解釈メカニズムを提案する。基本的には極小主義理論でこれまでに提案されたメカニズムをもとに、第2節で紹介したアイデアの問題点を修正したものである。

Vallduví (1992), Heycock (1993, 2008) によると、全ての文はフォーカス（あるいはトピック）を持つ。全ての「節」ではないので、従属節がフォーカス（トピック）を持たないことはありうる。文がフォーカスを持つことを次の設定によって統語的に保証する。

- (30) 主節は必ず F(ocus) を含む。F は解釈不可能な [focus] 素性(以降 [uF]) を持つ。F は Rizzi (1997), Cinque (1999) らのいわゆる「左周辺部 (left periphery)」の一部である。[uF] はしかるべき目標 (goal) と一致 (Agree) して消去される。Agree した goal を含む句は、文の「フォーカス句」とであると認定される。(Jackendoff(1972), Kato (1985) の F(ocus)-assignment に相当する。)

とりたて詞は「とりたて」という内在的性質のため、F とマッチする素性を常に持つ¹³。Miyagawa はそれを [focus] と名付けたが、次の例に見るように、とりたて詞は常にフォーカス解釈を受けるわけではない。

- (31) A: 昨日のパーティはどうだった?
 B: 花子が 寿司を 食べました。
 C: 花子は ケーキも 食べました。
 D: ケーキも 食べたから、太ったんだ。

「ケーキも」は (31C) の発話時点では確かにフォーカスである。しかし (31D) の発話時点において「花子がケーキも食べた」ことはすでに了解済みとなっており、「ケーキも」はフォーカスでない。このことから、「も」は常に文のフォーカスをマークする訳ではなく、ある前提に比べてより新しい情報があることを示すマーカーであると考えべきである。(31C) のように、それがたまたま「最新情報」であれば文のフォーカスになる。(31D) のように「も」句よりさらに新しい情報があれば、そちらが文のフォーカスとなる。

このことから、とりたて詞が持つのは [new information] (以降 [NI]) であると修正する。これは意味解釈に関わるので [+解釈可能] であり、Agree による認可を必要としない。しかし、F の [uF] と Agree すればその反映 (reflex) として [newest information] の値が付与される。これを担う句がその文のフォーカス句である。以上の操作を以下に図示する。

- (32) 統語部門 (Narrow Syntax (NS))
- | | | |
|--------------------|------------------------|--------------------------------|
| F ... | <u>α-も / は</u> | ... |
| [uF] | [new information (NI)] | |
| └──────────┘ Agree | | |
| ↓ | ↓ | |
| 値づけ・消去 | | [newest information] = [focus] |

¹³ その他の語句の場合、統語計算に入る際に随意的素性として付加される (cf. Chomsky 1995)。

次に、「とりたて句」と「フォーカス句」がそれぞれ意味解釈 (C-I) 部門でどう解釈されるか考える。Kato (1985: 89, 92) は (肯定文の) 「も」と「は」が (33a, b) の意味を持つとする。これを例文 (1a, b) に適用して得られる前提・断定解釈は (34a, b) のようになるだろう。

- | | |
|---|--|
| (33) a. 「も」 | b. 「は」 |
| 前提: $\exists x \forall \alpha x \in \lambda x P(x)$ | 前提: $\lambda x P(x)$ is well-defined |
| 断定: $\alpha \in \lambda x P(x)$ | 断定: $\alpha \in \lambda x P(x)$ |
| | 含意: $[\sim \exists x \forall \alpha x \in \lambda x P(x)]$ |
| (34) a. 「花子はケーキも食べた」 | b. 「花子はケーキは食べた」 |
| 前提: (寿司) $\in \lambda x$ [花子が x を食べた] | 前提: 「花子が食べたもの」が話題である |
| = 花子が (寿司) を食べた | |
| 断定: ケーキ $\in \lambda x$ [花子が x を食べた] | 断定: ケーキ $\in \lambda x$ [花子が x を食べた] |
| = 花子がケーキを食べた | = 花子がケーキを食べた |
| | 含意: ケーキ以外に, [花子が x を食べた] |
| | が真になるものはない |
| | = 花子が食べたものは他にない |

「も」の解釈は第1節で述べたとおりであるが、「は」の解釈は異なる。Katoによると、「花子が (寿司) を食べなかった」の前提 (暗示) は語用論的な含意に過ぎない。つまり、「花子が食べたもの」を話題としているときに「ケーキ」がそのメンバーであることが明示されると、会話の公理 (量の公理) から、その他の食べ物は「花子が食べたもの」に属さないことが含意される。

しかし、「も」の含意が意味論的に導出されるのに、「は」の含意が語用論での扱いになるという不一致は、理論の整合性という観点から問題である。また、(33b)/(34b)によると、「は」が「総記」(「食べたものは他にない」)の読みを持つことになるが、「は」が実際に持つのは「対比」(「食べなかったものがある」)の読みであるから、この点も問題である。

(33a) と平行な解釈ルールになるように (33b) の修正を行う。寺村 (1991) が述べるように、「 α は P 」の前提は「 $\sim P(\sim \alpha)$ 」である。つまり前提となるのは、明示された命題の否定命題である。反対に、前提 ($\sim P$) の方から明示命題 (P) を見るならば、「 α は $\sim P$ の集合に属さない ($\sim P(\alpha) = F$)」という否定的断定が新情報である。この前提・断定を組み込んで「は」の解釈ルールを修正し (35b) に示す。比較の都合上、(33a) を (35a) として再掲する。このルールを例文 (1a, b) に適用して得られる解釈を、それぞれ (36a, b) に示す。

- | | |
|---|--|
| (35) a. 「も」 | b. 「は」 |
| 前提: $\exists x \forall \alpha x \in \lambda x P(x)$ | 前提: $\exists x \forall \alpha x \in \lambda x \sim P(x)$ |
| 断定: $\alpha \in \lambda x P(x)$ | 断定: $\alpha \notin \lambda x \sim P(x)$ |

り、統語要素は派生計算から排出されないという主張がある (e.g. Bošković 2007, Fox and Pesetsky 2005)。Chomsky (2008: 143) 自身、PIC 効果を干渉 (intervention) 原理に還元する可能性を示唆している。この考えを採用するならば、何が干渉要素 (intervener) になるのか考えねばならない。本稿は次の干渉原理を提案する。

(39) Agree (P, α) は、同種異値の素性をもつ β によって阻害される。

「同種異値」とは、たとえば「極性」において「肯定 (positive (Pos))」と「否定 (negative (Neg))」の値が異なることを指す。(37a, c) で示したとおり、「も」は断定と前提が同じ極性を持つことを指定する。従って、「も」のとりたては肯定極性を含む ([NI_{Pos}])。対して、「は」は断定と前提が異なる極性を持つことを指定する。従って、「は」のとりたては否定極性を含む ([NI_{Neg}])。(39) より、Agree (F, も), Agree (F, は) は途中の極性オペレータによって以下のように制約される¹⁴。

- (40) a. 文の極性と Agree (F, も) の可否 b. 文の極性と Agree (F, は) の可否
- (i) [PolP OP_{Pos} [... α -も ...] \emptyset]...F (i) [PolP OP_{Pos} [... α -は ...] \emptyset]...F
- [Pol_{Pos}] [NI_{Pos}] [uF] [Pol_{Pos}] [NI_{Neg}] [uF]
- Agree^{OK} [] Agree* []
- (ii) [PolP OP_{Neg} [... α -も ...] ない]...F (ii) [PolP OP_{Neg} [... α -は ...] ない]...F
- [Pol_{Neg}] [NI_{Pos}] [uF] [Pol_{Neg}] [NI_{Neg}] [uF]
- Agree* [] Agree^{OK} []

ちなみに、(39) は他のタイプの干渉効果も説明できる。疑問詞は量化詞とスコープ相互作用を起こすことから量化詞の一種であると考えられる。疑問量化の素性 [Wh] と量化詞のそれ [Qu] は「同種異値」であるので、次の干渉が起こる¹⁵。

- (41) a. ?* [CP [ジョンかビルが_s/誰もが_s 何を 飲みました] か] ?
- [Qu] [Wh] [Q]
- Agree* []
- b. [CP [何を₁ ジョンかビルが_s/誰もが_s _t 飲みました] か] ?
- [Wh] [Qu] [Q]
- Agree^{OK} []

(Hoji (1985: 268) より改変)

量化詞、疑問詞いずれも量化に関わる (同種) が、そのタイプが異なる (異値) ため、量化に関する Agree 関係を結ぶことを互いに阻害する。量化詞は Agree による認可を特に必要としないが、疑問詞は Agree が無いと疑問のオペレータになれないため、正しい疑問文が得られない。Agree (C, 疑問詞) 関係を成立させるため、疑

¹⁴ Rizzi (1990) に従い、否定文の PolP 指定部には否定のオペレータがあると考える。肯定文の場合も、肯定命題を断定することから、PolP 指定部に肯定のオペレータがあると考える。
¹⁵ 疑問詞はフォーカス解釈に関わる素性も有する。これに関しては 4.3 節で述べる。

は否定極性を持つため、(44a)のように肯定極性オペレータ (OP_{Pos}) が間にあると Agree (F, は) が阻害される。ゆえに (44a) は容認されない。(44a)にあるように、OP_{Pos} を越えて「は」がかき混ぜ移動すれば Agree (F, は) が成立し、文が容認される。逆に、「も」は肯定極性を持つため (45b) のように否定極性オペレータ (OP_{Neg}) が間にあると Agree (F, も) が阻害される。従って (45b) は非文である。この場合も、「も」が OP_{Neg} を越えてかき混ぜ移動すれば Agree が成立し、(45b') が容認される。肯定文の「は」、否定文の「も」の義務的な移動はこのように、F の解釈不可能素性を消すという動機づけで起こると説明される。

他方、(44b) の Agree (F, も)、(45a) の Agree (F, は) は問題なく成立する。ゆえに、否定文の「は」、肯定文の「も」は生起位置にとどまってよい。

次に、(45a) が「ない > は」解釈のみを持つ (ように見える) こと、また (45b') が「も > ない」解釈のみを持つことについて説明する。まずは (45b') を考える。「も」は F と Agree し、その付加した句はフォーカス句であると認定される。フォーカスは「最後の断定」でなければならないので、必ず広いスコープで解釈される ((43c))。

(45a) も同様で、フォーカス「ケーキは」は、「ない」よりも広いスコープを取るはずである。Kato (1985) は、(45a) の前提が「花子が箸で (寿司) を食べた」という肯定命題になることから、文の否定が前提に含まれていないと考えている。しかし、「は」の新しい解釈ルール ((35b)) を (45a) に適用すると、「ない」はやはり前提に含まれていることが分かる。肯定文の解釈 (36b) ((46a) として再掲) と否定文の解釈 (46b) を比較してみよう。唯一の違いは前提句に「ない」が含まれているか否かである。

- | | |
|--|--|
| (46) a. 「花子は <u>ケーキ</u> は食べた」 | b. 「花子は <u>ケーキ</u> は食べなかった」 |
| ↓前提句 P(x) = 「花子が x を食べた」 | ↓P(x) = 「花子が x を食べ <u>なかった</u> 」 |
| 前提: $\exists x \alpha x \in \lambda x \sim P(x)$ | 前提: $\exists x \alpha x \in \lambda x \sim P(x)$ |
| (寿司) $\in \lambda x \sim$ [花子が x を食べた] | (寿司) $\in \lambda x \sim$ [花子が x を食べ <u>なかった</u>] |
| = 花子が (寿司) を食べ <u>なかった</u> | = 花子が (寿司) を食べた |
| 断定: $\alpha \notin \lambda x \sim P(x)$ | 断定: $\alpha \notin \lambda x \sim P(x)$ |
| ケーキ $\notin \lambda x \sim$ [花子が x を食べた] | ケーキ $\notin \lambda x \sim$ [花子が x を食べ <u>なかった</u>] |
| = 「花子が <u>ケーキ</u> を食べ <u>なかった</u> 」は偽 | = 「花子が <u>ケーキ</u> を食べた」は偽 |
| = 花子が <u>ケーキ</u> を食べた | = 花子が <u>ケーキ</u> を食べ <u>なかった</u> |

(46b) の否定辞「ない」は前提句 P(x) に含まれている。しかし、「は」の否定極性はその前提句に重なることによって、前提 $\sim P(x)$ は肯定命題となる (\sim [花子が x を食べなかった] = [花子が x を食べた])。断定部分に否定 (\notin) が含まれるが、それは肯定文 (46a) の断定部分も同じである。つまり、断定部分の否定は「は」の否定極性の表れである。否定辞の効果は前提句にのみ現れるのだから、(45a) / (46b) の本当のスコープ関係は「は > ない」である。

ここで、(45a) の「ない」と「は」の統語的階層関係に注目しよう。「は」は否

定辞「ない」よりも低い位置にある（「ない > は」）。しかし、スコープ解釈は「は > ない」である。このことから、フォーカスの広いスコープ読み（(43c)）はその統語位置に関係なく保証されると考えられる。このことは「も」についても同じである。（45b'）において「も」が「ない」よりも広いスコープを取るのは、「も」が移動したからではなく、フォーカスだからである。こう考えると、なぜ「も」の移動が再構築効果を持たないかが自然に帰結する。広いスコープ読みは移動と関係なく付される解釈だからである。

4.2. 節の非対称

次に、ある種の従属節中のとりたて詞が主節とは異なるふるまいを見せる事実について考察する。（2.3節で述べたとおり、「も」だけを取り上げる。）第2節で確認された「節の非対称」は（47）のとおりである。（47b）に該当する例を（48）、（49）に挙げる。

（47） 節の非対称：

- a. トピックを持つ節では「も」に統語的・意味的制約がかかる。
すなわち、否定文ではvP内にとどまれない。「も > ない」読みが義務的である。
- b. トピックを持たない節では上の制約がかからない。ただし、補部節は例外である。

- （48） a. [花子が [PoIP [vP 箸で ケーキも 食べ] なかつ] たので 太郎は驚いた。（=（14a））
[否定文でも「も」がvP内にとどまれる。統語関係を反映して、「ない > も」読みのみ可能。]
- b. [花子が ケーキも₁ [PoIP [vP 箸で 食べ] なかつ] たので 太郎は驚いた。（=（14b））
[統語関係を反映して、「も > ない」、「ない > も」いずれの解釈も可能。]

- （49） a.?? 太郎は [補部節 花子が [PoIP [vP 箸で ケーキも 食べ] なかつ] た] 思っている。
[否定文では「も」がvP内にとどまれない。]
- b. 太郎は [補部節 花子が ケーキも₁ [PoIP [vP 箸で 食べ] なかつ] た] 思っている。
[「も > ない」読みが義務的。]

トピックの有無と「も」の統語的・意味的制約がどう関係するのか、提案された分析を用いて説明する。まず補部節以外の従属節について説明し、次に補部節がどうしてその例外になるのか考える。

トピックを持たない節は、統語・意味いずれの点でも主節と異なると考えられる。まず統語構造であるが、Kuno and Takami (1993) によると、トピックはS'に直接支配される位置に生じる。（S'はRizzi (1997) などのTopPに相当すると考えられる。）この考えに従うと、（18）タイプの従属節は随意的にS'/TopPまで投射するので随意的にトピックを持つが、（19）タイプの従属節はS'までしか投射しないのでトピックを持たないということになる。

また、意味解釈の観点からこの非対称を考える。文はしかるべき情報構造 (information structure (IS)) を割り当てられねばならない。IS の基本的機能は「新情報 - 旧情報」の区別である (Erteschik-Shir 2007, Partee 1991)。トピックを提示すれば「トピック (旧) - コメント (新)」の IS が得られる。また、フォーカスを提示すれば「フォーカス (新) - 前提 (旧)」の IS が得られる。従属節が S"/TopP を持たず、従ってトピックを持たない場合、その節は情報構造の単位としては不完全 (IS-defective) であることになる。つまり、そのような節はトピックのみならずフォーカスも持てないはずである。

これを踏まえ、例文 (48a, b) の構造を図示する。

- (50) [TopP [FP [TP... [従属節 CP [TP (も) [PolP OP_{Neg} [vP (も)... ない] T] C] ...T] F] Top]
 [NI_{Pos}] [Pol_{Neg}] [NI_{Pos}] [uF]

従属節は IS-defective であり F を持たない。また、Chomsky (2008: 146) によると、探査要素 (probe) は非補部節の内部を探査することができない。(「主節の probe から見えない」ことを影をつけて表す。) ゆえに、「も」が従属節のどの位置にあるとも、F と Agree を起こす可能性はない。「も」の [NI] 素性は [+解釈可能] であるので、Agree しないことに問題はない。

Agree の欠如が意味することは、「も」が [newest information] = [focus] として解釈を受けないということである。フォーカスならば「最後の断定」として特別な解釈ルール ((43c)) を与えられるが、フォーカスでないとりたて詞は統語位置で解釈される。(48a) のように、「も」が vP 内にとどまっていれば「ない」の方が広いスコープを取り、「も」の断定を否定する。(48a) の前提・断定解釈は次のようになるだろう。

- (51) [花子が [PolP [vP 箸で ケーキも 食べ] なかつ] た)-(ので、太郎は驚いた)
 ↓「も」の解釈に関わる前提句: [vP (花子が) 箸で x を食べ (る)]

- | |
|--|
| (i) 「も」の解釈に関わる前提: (寿司) ∈ λx [箸で x を食べ(る)]
(ii) 「も」の解釈に関わる断定: ケーキ ∈ λx [箸で x を食べ(る)]
(iii) 「ない」の解釈に関わる断定: 上のことは真でない
= (寿司) は箸で食べ (る) が ケーキは箸で食べない [ない > も] |
|--|

前提 (i) は否定できないので、「ない」は断定 (ii) にのみかかり、(iii) の解釈が得られる。

(48b) では「も」がかき混ぜられ、「ない」よりも上位位置を占める可能性が出てくる。移動位置で解釈されれば「も > ない」、痕跡位置で解釈されれば「ない > も」の読みが得られるため、多義的となる。

では、(48a, b) の主節 F はどのようにして [uF] を消すのだろうか。「も」は

Agreeをしなくてもよいが、Fは[uF]素性に値を付け、消去せねばならない。その可能性は2つ考えられる。まず、主節内に別の[NI]要素があればそれとAgreeするが、これについては後述する(4.3節)。しかし、(48a, b)のように、[NI]を持つ要素が見あたらない場合もある。Miyagawa (2005, 2007)でも示唆されていることであるが、その場合は、「フォーカス-前提」ではなく「トピック-コメント」のISが作られればよい。トピックすなわち「旧情報(old information)」を除いた部分がコメントすなわち「旧でない情報(less old information)」である。肯定的に「新」と言える句がない場合には、この「旧でない情報」が消去法的に新情報となる(cf. Heycock 2008)。ただし、これはあくまでも他に選択肢がない場合に限られる。言い換えると、「フォーカス-前提」の方が有標のISであるので、そちらの派生が優先される。フォーカスになる資格をもつ[NI]要素が利用できず、統語部門(Narrow Syntax (NS))において有標のISを派生する見込みがない場合は、無標の「トピック-コメント」ISを作る。その場合は、「～トピック」となる残留部TPが何らかの形でFの[uF]を消去する。LF表示またはC-I部門でのSPEC-Fへの残留部移動(remnant movement)によってその消去ができると考えることにする(cf. Rizzi (1997))。つまり、(48a, b)の主節Fの[uF]は(50)に示すとおり、[NI]要素とAgreeする可能性がないので、TPが残留部移動して「トピック-コメント」のISを作ることで値を消去するのである。

FとAgreeできるフォーカス候補がない場合は残留部移動によってF[uF]の値づけができると考えると、次の疑問が生じるかもしれない。4.1節で主節の派生を考察した際、否定極性オペレータによってAgree(F, も)が阻害されると論じたが(cf. (45b)), この場合はどうして残留部移動によるF[uF]の消去ができないのだろうか。残留部移動はNSが「フォーカス-前提」ISを作れなかった場合に起こるLF/C-Iでの操作だとした。主節においてAgree(F, も)が阻害されていても、「も」を干渉要素よりも上にかき混ぜればAgreeは可能になる。(そして(45b')が作られる。)NS操作によってFのAgreeを可能にする方法がある以上、そちらの解決方法の方が優先される。つまり、正確に言うと、(45b)を派生しようとするとき、Agree(F, も)を成立させるべくかき混ぜが必ず起こって(45b')のような語順(構造)に至るため、(45b)の語順(構造)で文の派生が終わる可能性はないのである。

ここまでの話をまとめる。トピックを持たない従属節はIS-defectiveであるためにFを持たず、主節のFも、従属節内を探索できない。従って、その従属節内の「も」がFとAgreeしてフォーカス認定される可能性はない。このような節で「も」に統語的・意味的制約がかからないのは、「も」がフォーカス認定されないからである。まず、Agree(F, も)の可能性がない以上、「も」に移動の義務はなく、その統語位置は自由となる。従って、否定文にあってもvP内にとどまれる。また、フォーカスでない「も」は統語位置に従ってスコープ解釈を付されるので、vP内にとどまれば「ない>も」読みのみ、vP外にかき混ぜられれば「も>ない」「ない>も」読みが可能となる。対して、トピックを持つ節はFを持つため、その中に生じる「も」

「だけ」が「も」よりも上位にある (53a, b) 中の「も」はフォーカスでないので、否定文であっても移動する必要がなく、また、「ない」よりも狭いスコープを取れる。「だけ」が下位にある (54) の「も」は、フォーカス認定されるため広いスコープ読みしかできない。

次に、干渉効果について考える。第3節で言及したが、疑問詞は量化詞に後続することができない ((41))。この効果を次のように説明した。いずれも量化に関わる (同種) が、そのタイプが異なる (異値) ため、量化に関する Agree 関係を結ぶことを互いに阻害する。量化詞は Agree による認可を特に必要としないが、疑問詞は Agree がないと疑問のオペレータになれないため、正しい疑問文が得られない。Agree(C, 疑問詞) 関係を成立させるため、疑問詞の方が量化詞よりも上にかき混ぜられることが義務的に起こる。

同じ干渉効果が、疑問詞ととりたて詞の間でも見られると予測される。いずれもフォーカス候補として [NI] 素性を持つが、とりたて詞は「比較」、疑問詞は「同定」により新情報をもたらす。とりたて詞は Agree を必要としないが、疑問詞はフォーカス解釈が義務的である (cf. Horvath 1986, Kobayashi 2001)。ゆえに、Agree(F, 疑問詞) を成立させるため、疑問詞がとりたて詞よりも上位にかき混ぜられることが義務的に起こると予測される。次の例が示すとおり、正しい予測である。(繰り返し疑問 (echo question) の読みの可能性を排除するため疑問詞の前に「一体」を付している。)

- (55) a.?? 花子も (一体) 何を 食べたの?
 b. (一体) 何を 花子も 食べたの?

また、疑問文における「も」のスコープ解釈も本稿の分析で説明することができる。2.2 節で指摘したように、疑問文では「も」の狭いスコープ読みが可能である。

- (56) a. ジョンが 本も 買わなかったか。(= (12b)) [も > ない, ない > も]
 b. 太郎は [_{CP} 誰が ケーキも 食べなかった か] 知っている。
 [も > ない, ない > も]

この事実は次のように説明される。疑問文では Agree(F, 疑問詞) が義務的に起こる¹⁷。従って「も」がフォーカス認定されることはなく、統語位置を反映して多義的スコープ解釈を持つことが可能になるのである。

4.4. まとめ

第4節の議論をまとめると、とりたて詞「も」「は」の統語的・意味的特徴は次のように説明される。主節は必ず F ([uF] 素性) を持ち、フォーカスとなる要素を探す。ほかに候補がなければ「も」「は」がその goal となる必要がある。とりた

¹⁷ Yes-No 疑問文にも音形ゼロの疑問量化詞があると考えられる (cf. Radford 2004: 220)。

て詞には極性があり、「も」は肯定、「は」は否定の極性を持つ。Agree(F, も) は否定, Agree(F, は) は肯定のオペレータに阻害される。その場合, とりたて詞は Agree 可能な位置へ移動せねばならない。ゆえに「も」は否定文で, 「は」は肯定文で vP 内にとどまることができない。また, フォーカスは「最新情報」=「最後の断定」であるので否定されえず, 常に「ない」よりも広いスコープをとる。「も > ない」読みが義務的であるのは「も」が移動するからではなく, フォーカスであるからである。「は」は「ない」よりも狭いスコープを取ると言われてきたが, 「は」の否定極性と否定辞「ない」とを混同したためにそう見えるだけである。実際は「は」も, 「ない」よりも広いスコープを取る。

本稿は「新情報」と「フォーカス」を区別した。「新情報」は相対的であるため, より新しい新情報があることを妨げない。逆に, フォーカスは「最新情報」であるので, 文中に一つしか現れない。フォーカスは F との Agree によって認可されるため, とりたて詞(新情報)が複数あれば, 階層的により上位の方がフォーカス認定される。また, トピックを持たない非補部節にとりたて詞が生じた場合も F との Agree が起こらない。その節には F がなく, 上位節の F がその節内を探査することもできないからである。フォーカス認定されなかつたとりたて詞は単なる「新情報」であり, その統語位置で解釈される。つまり, 上位に「ない」があればそれを前提に含むことができず, 「ない」よりも狭いスコープ解釈となる。また, F と Agree するという動機づけがないので, こういった位置に生じるとりたて詞には義務的移動が観察されない。

5. フォーカスと否定

第4節の議論で, 「フォーカスは否定できない」とした。しかし従来言われてきたことは, 「前提」が否定されえない情報であり, フォーカス(断定)が否定の対象となる, というものである。この節ではこの考えに反対し, 「フォーカスは否定できない」という本稿の主張が(フォーカス解釈される)とりたて詞だけでなく, 全てのフォーカスに当てはまると論じる。

その前に誤解のないよう, 「前提を否定すること」と「否定命題を前提とすること」の違いを確認しておこう。「前提」は「会話参加者が共通して正しいと知っている(と話し手が考える)事柄」であるため, 前提を否定することはできない。本稿の分析では否定辞が前提に含まれる((46b))が, これは前提を否定しているのではなく, 否定を含んだ命題を前提としているのである。

フォーカスが否定される(とされる)例はすでに(9B), (10B)に挙げたが, フォーカスと否定の関係を詳しく調べるには談話・イントネーションなども考慮する必要がある。Herburger (2000) が英語データを用いて詳述しているので, ここではそれをもとに考察をすすめる。フォーカスの議論でしばしば中心的なデータとなるのは, 「同定的 (identification)」フォーカスを含む文である。次の例とその解釈を試みよう。

- (57) Sascha didn't visit MONTMARTRE. (下降-上昇イントネーション)
 [Sascha が訪れたのはモンマルトルではない] [否定 > フォーカス]
- (58) Sascha didn't visit MONTMARTRE. (下降イントネーション)
 [Sascha が訪れなかったのはモンマルトルである] [フォーカス > 否定]
 (Herburger (2000: 29) より改変。和訳は引用者。)

Herburger によると、(57) は、Sascha がいくつか観光計画を立てており、彼がどこに行ったかに会話参加者の関心があるときに適切な文である。一方 (58) は、Sascha が観光計画を一部キャンセルしたことが分かり、彼がどこに行かなかったかに関心があるときに適切な文である。常識的に言って前者の状況の方が想像しやすいため、(57) の方がデフォルトの解釈である。

この議論を額面どおりに受け取ると、「フォーカスは否定できない」という本稿の主張は (57) の存在によって反証される。しかし、Herburger はこの説明を行った章 (第 2 章) に補遺を付し、(57) の解釈にはさらなる「含意」が必要であることを述べている。この読みをするときには上昇イントネーションで文が終わるが、Carlson (1984) が指摘するように、これは文が完結しておらず、さらに続きがあることをほのめかすマーカーである (Herburger 2000: 51)。また別の箇所では、Rooth (1985) の分析に言及して、フォーカスの解釈には「対比 (contrast)」が必要であるともしている (pp. 12-13)。確かに、「Sascha が行った場所」を知りたがっている人に「Sascha が行かなかった場所」を教えても、相手の求める情報を与えたことにならない。(57) が適切な文として解釈されるには、「Sascha が x に行った」という前提があるだけでは不十分で、次の (59a) の情報があらかじめ共有されている必要がある。また、(59c) が暗示されねば「モンマルトル (行かなかった場所)」と「その他の場所 (行った場所)」が対比されず、「モンマルトル」がフォーカスとして解釈されていないことになる。

- (59) a. 会話参加者があらかじめ知っている情報: Sascha の行く予定の場所 = {M, P, N}
 b. (57) の発話者が明示する情報: Sascha の行った場所 ≠ M
 c. 聞き手が談話的に復元する情報: Sascha の行った場所 = {P, N}

問題なく同定的と言える (58) に対比の含意はない。聞き手の知りたいこと (「行かなかった場所」) に直接答えており情報が完結しているのだから、それ以上の含意は生じない。(57) を解釈するときに (59c) のような「対比」の含意が必要であるのならば、(57) のフォーカスは「同定的」というより「とりたて」の性質を持つと言えるだろう。

実際、(59c) は、対比の「は」と同じ解釈ルール (60) を (57) に適用して得ることができる。(本稿は「前提」と「暗示・含意」を区別していない (cf. 注 3)。例文 (57) の聞き手は「Sascha が行った場所」を知らないのであるから、「行った場所」の情報はこの場合文字どおりの「前提」ではなく、「暗示・含意」として聞き手に示される。)

- (60) 対比のとりたての解釈ルール (= (35b))

前提: $\exists x \neq \alpha \ x \in \lambda x \sim P(x)$ 断定: $\alpha \notin \lambda x \sim P(x)$

- (61) “Sascha didn’t visit MONTMARTRE.”

↓ フォーカス句: MONTMARTRE/ 前提句 $P(x) = \text{Sascha didn't visit } x$ 前提: (モンマルトル以外のどこか) $\in \lambda x \sim [\text{Sascha が } x \text{ に行かなかった}]$

= Sascha が (モンマルトル以外のどこか) に行った (= (59c))

断定: モンマルトル $\notin \lambda x \sim [\text{Sascha が } x \text{ に行かなかった}]$

= 「Sascha がモンマルトルに行った」は偽

= Sascha がモンマルトルに行かなかった (= (59b))

「Sascha がどこかに行った」という前提だけでは (57) のフォーカス解釈に不十分である。(59c) の情報がいかに得られるかを補足説明として付け足すよりも、対比のとりたての解釈ルールの一部に組み込む方が議論が簡潔になり、より好ましいと考えられる。そうすると、(61) の前提句の中に否定辞 *not* が入り込んでいることから分かるように、否定辞はフォーカスでなく前提の方に含まれる。断定に否定があるのは対比のとりたての否定極性によるもので、否定辞による否定ではない。

以上の議論をまとめると、フォーカスには次の種類があることになる。

- (62) a. とりたて: (i) 同類 (e.g. 「も」)
 (ii) 対比 (e.g. 「は」, 下降-上昇イントネーションのフォーカス)
 b. 同定: (e.g. 疑問詞, 下降イントネーションのフォーカス)

「とりたて」とは、定項によって飽和した命題を前提とし、(i) それと極性の同じ新情報を追加する (同類) か (ii) 極性が反対の新情報を追加する (対比) ことで、会話参加者の共有知識を増やしていく。Kiss (1998) の言う *information focus* に対応すると思われる¹⁸。対して「同定」とは、変項を含む命題の存在 ($\exists x P(x)$) を前提とし、変項の内容をフォーカスが同定すること ($x = \alpha$) である。Kiss の言う

¹⁸ Kiss はこれを談話情報の一種とするが、本稿の議論が正しければこのフォーカスも統語に関わることになる。Miyagawa (2007: 55) は逆に、「も」が統語に関わることから、「も」は *identificational focus* であると論じる。このタイプのフォーカスは総記解釈を持つはずであるが、Miyagawa はその証拠として例文 (i) を挙げる。しかし、「不定語+も」は否定極性要素 (NPI) として特別な解釈を持つため、これをもとに全ての「も」が *identificational focus* であると主張するのは問題がある。例 (ii) から分かるように、NPI として用いられない場合、「も」は総記の解釈を持たない。つまり、(iiB) に「太郎が会ったのは優子と花子だけだ」という含意はない。

(i) 太郎が 何も 買わなかった。

(ii) A: 太郎は 昨日 花子と 会った。

B: (太郎は 昨日) 優子とも 会ったよ。

Kuroda (1965 [1979]) は、不定語に付く「も」は「でも」の異形態であるとしている。この分析が正しければ、同類のとりたて「も」と (i) の「も」はそもそも異なる語彙素であることになる。

identificational focus に相当する。(58) が示すとおり、この解釈においても否定辞は前提に含まれる。

以上の議論が正しければ、いずれのフォーカス解釈においても否定辞は前提に含まれ、フォーカスによる断定を否定することはない。(62) に示す以外のフォーカスもあるかもしれないので、「フォーカスは否定できない」と結論づけるのは性急に過ぎるかもしれない。しかしながら、少なくともこれまでの研究で「否定 > フォーカス」読みとされてきたものには問題があり、実際は逆のスコープ解釈になっていることが示されたと考える。

6. 再構築とは何か

Miyagawa (2005, 2007), Hasegawa (1994a, 2005) は、「も」のフォーカス移動は再構築できないと論じる。しかし、再構築効果が見られないのは「ない」とのスコープ関係に関してのみである。次の例が示すとおり、別種の意味解釈に関しては、「も」句の再構築効果が見られる。

- (63) a. 3 皿のケーキも_i 2 人の学生が _h 注文した。
 A. [2 人の学生で合計 3 皿の注文] [3 皿 > 2 人]
 B. [2 人の学生がそれぞれ 3 皿, 合計で 6 皿の注文] [2 人 > 3 皿]
 b. 自分の書いた本も_i 太郎は _h けなした。 [太郎 = 自分]

(63a) で「2 人 > 3 皿」のスコープ読みができることから、「も」句の痕跡位置は解釈に使うことができると分かる。また (63b) から、束縛関係を成立させるために「も」句が痕跡位置で解釈されうることが分かる。先行研究が行ってきたような、「○○の移動は再構築できるか否か」というアプローチでは、「も」句がある解釈については再構築効果を示し、ある解釈についてはその効果を示さない事実を捉えることが難しい。

Chomsky (2008: 146) が指摘するように、ある要素 α が移動した場合、移動位置と痕跡位置には同じコピー α があるのだから、どちらも解釈にアクセスできるはずである。つまり、どんな移動も再構築できるはずである。ただしそれは、 α が統語位置に依存する解釈を付される場合である。こう考えると、「も > ない」の読みが義務的である事実は、再構築の可否ではなく、フォーカスである「も」が特別な前提・断定解釈を付されるからだと説明できる。すなわち、「最後の断定」として、どの統語位置にあらうとも広いスコープ読みをするためである。

一方、他の量化詞との量化関係や照応関係は前提・断定解釈とは関係ないので、フォーカスゆえの特別扱いはない。つまり、「も」句の統語位置を反映した解釈が与えられる。ゆえに (63a, b) に見るとおり、痕跡位置も解釈にアクセスできる。

7. 結論

これまでのフォーカス研究は様々な概念を混同しており、そのために理論が複雑

化するだけでなく、経験論的な問題も少なからず持っていた。本稿は異なるタイプのとりたておよびフォーカスの統語的・意味的特徴が統一的に説明できる分析を提案した。その際、次の概念を区別すべきものとして提示した。

まず、「とりたて詞=フォーカス」ではない。とりたて詞は「新情報」のマーカにすぎず、FとAgreeすることで初めてフォーカス認可される。フォーカスは文の「最新情報」として最後の断定を行う。ゆえに、必ず広いスコープ読みを持つ。

次に、「前提句=前提」ではない。対比の「は」は否定極性を持つため、前提句と前提の極性が逆になる。例えば、「花子はケーキは食べた」の文から作られる前提句は「花子がxを食べた」であるが、前提は「花子が(寿司)を食べなかった」である。これまでの研究は前提句と前提を混同してきたために、前提に加えて語用論的含意をも設定せねばならないなど、複雑な説明が必要であった。

第三に、「否定辞による否定」と「断定部分の否定」は別物である。例えば、否定の「は」文「花子はケーキは食べなかった」の前提は、「花子が(寿司)を食べた」である。前提が肯定命題となっているのは、否定辞が前提の否定極性に重なったためである。つまり否定辞の意味は前提に含まれている。断定部分の否定(「花子がケーキを食べた」は偽)は否定辞によるものではなく、「は」の否定極性の表れである。

第四に、節の性質は常に同じではない。トピックを持たない節は情報構造として不完全であり、Fを持たない。そういう節に生じるとりたて詞はFとAgreeしてフォーカス認定される可能性がない。(上位節のFと長距離Agreeができる補部節は除く。)従って、このようなとりたて詞はフォーカスの統語的・意味的特徴を欠くことになる。

最後に、「再構築操作」というものが実在し、その適用が統語的に制約されるというGB理論のアイデアを極小主義の分析にそのまま持ち込むことも、とりたて詞の分析を複雑にしてきた。コピー理論のもとでは再構築の効果は常にあると予測される。それが見られない場合、再構築操作の適用(あるいは、痕跡位置の利用)が統語的に阻害されているというよりは、統語位置に依存しない意味解釈規則が適用されていると考える方が妥当である。

これらの概念を正しく区別し、その上でとりたて詞の統語的・意味的特徴の説明を試みた。とりたて詞が義務的に移動するのは、それが文の唯一のフォーカス候補であり、移動しなければその認定が妨げられる場合である。フォーカス認定はFとのAgreeによって行われるが、とりたて詞と反対の極性を持つオペレータが間にあるとAgreeが阻害される。ゆえに、「も」は否定文、「は」は肯定文で義務的に移動する。また、とりたて詞がフォーカス認定されれば、必ず「ない」よりも広いスコープを取る。フォーカス認定されない場合には、統語的階層関係によってスコープ解釈が決まる。

参 照 文 献

- Akmajian, Adrian (1979) *Aspects of the grammar of focus in English*. New York: Garland.
- Bošković, Željko (2007) On the locality and motivation of Move and Agree: An even more minimalist theory. *Linguistic Inquiry* 38: 589–644.
- Carlson, Lauri (1984) Focus and dialogue game: A game-theoretical approach to the interpretation of intonational focusing. In: Lucia Vaina and Jaakko Hintikka (eds.) *Cognitive constraints on communication*, 295–333. Dordrecht: Kluwer.
- Chomsky, Noam (1995) *The minimalist program*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2000) Minimalist inquiries: The framework. In: Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka (eds.) *Step by step: Essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik*, 89–155. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2007) Approaching UG from below. In: Uli Sauerland and Hans-Martin Gärtner (eds.) *Interfaces + Recursion = Language?: Chomsky's minimalism and the view from semantics*, 1–29. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Chomsky, Noam (2008) On phases. In: Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria Luisa Zubizarreta (eds.) *Foundational issues in linguistic theory: Essays in honor of Jean-Roger Vergnaud*, 133–166. Cambridge, MA: MIT Press.
- Cinque, Guglielmo (1999) *Adverbs and functional heads: A cross-linguistic perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- Erteschik-Shir, Nomi (2007) *Information structure: The syntax–discourse interface*. Oxford: Oxford University Press.
- Fox, Danny and David Pesetsky (2005) Cyclic linearization of syntactic structure. *Theoretical Linguistics* 31: 1–45.
- Hasegawa, Nobuko (1991) Affirmative polarity items and negation in Japanese. In: Carol Georgopoulos and Robert Ishihara (eds.) *Interdisciplinary approaches to language: Essays in honor of S.-Y. Kuroda*, 271–285. Dordrecht: Kluwer.
- Hasegawa, Nobuko (1994a) Economy of derivation and A'-movement in Japanese. In: Masaru Nakamura (ed.) *Current topics in English and Japanese*, 1–25. Tokyo: Hituzi Syobo.
- 長谷川信子 (1994b) 「も」と否定辞と論理形式」『言語』23(2): 116–119.
- Hasegawa, Nobuko (2005) The EPP materialized first, Agree later: Wh-questions, subjects and *mo* 'also'-phrases. *Scientific Approaches to Language* 4: 33–80. Kanda University of International Studies.
- Herburger, Elena (2000) *What counts: Focus and quantification*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Heycock, Caroline (1993) Focus projection in Japanese. *Proceedings of NELS* 24: 157–171.
- Heycock, Caroline (2008) Japanese *-wa*, *-ga*, and information structure. In: Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito (eds.) *Handbook of Japanese linguistics*, 54–83. Oxford: Oxford University Press.
- Hoji, Hajime (1985) Logical form constraints and configurational structures in Japanese. Doctoral dissertation, University of Washington.
- Horvath, Julia (1986) *FOCUS in the theory of grammar and the syntax of Hungarian*. Dordrecht: Foris.
- Jackendoff, Ray S. (1972) *Semantic interpretation in generative grammar*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Kato, Yasuhiko (1985) Negative sentences in Japanese. *Sophia Linguistica* 19 [Monograph]: 1–229. Sophia University.
- Kayne, Richard S. (2008) Antisymmetry and the lexicon. Ms. New York University.
- Kiss, Katalin É. (1998) Identificational focus versus information focus. *Language* 74: 245–273.
- Kobayashi, Akiko (2001) The syntax and semantics of *wh*-questions. Doctoral dissertation, Hiroshima University.
- Kuno, Susumu (1973) *The structure of the Japanese language*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Kuno, Susumu and Ken-ichi Takami (1993) *Grammar and discourse principles: Functional syntax and GB theory*. Chicago: University of Chicago Press.
- Kuroda, S.-Y. (1965 [1979]) *Generative grammatical studies in the Japanese language*. Doctoral dissertation, MIT. Reprinted, New York: Garland Press, 1979.
- Kuroda, S.-Y. (1969–70 [1992]) Remarks on the notion of subject with reference to words like *also*, *even*, and *only*, Part I and II. *Annual Bulletin, Research Institute of Logopedics and Phoniatrics* 3: 111–129

- (Part I) & 4: 127–152 (Part II). University of Tokyo. Reprinted in *Japanese syntax and semantics: Collected papers*, 78–113. Dordrecht: Kluwer, 1992.
- Kuroda, S.-Y. (2005) Focusing on the matter of topic: A study of *wa* and *ga* in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 14: 1–58.
- Lambrecht, Knud (1994) *Information structure and sentence form*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 益岡隆志・野田尚史・沼田善子 (編) (1995) 『日本語の主題と取り立て』東京: くろしお出版.
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』東京: 大修館書店.
- Miyagawa, Shigeru (1997) Against optional scrambling. *Linguistic Inquiry* 28: 1–25.
- Miyagawa, Shigeru (2005) On the EPP. *MIT Working Papers in Linguistics* 49: 201–236.
- Miyagawa, Shigeru (2007) Unifying agreement and agreement-less languages. *MIT Working Papers in Linguistics* 54: 47–66.
- 野田尚史 (1995) 「文の階層構造からみた主題ととりたて」益岡隆志・野田尚史・沼田善子 (編) 『日本語の主題と取り立て』1–35. 東京: くろしお出版.
- 沼田善子 (2000) 「とりたて」金水敏・工藤真由美・沼田善子 (編) 『時・否定と取り立て』151–216. 東京: 岩波書店.
- 沼田善子・徐建敏 (1995) 「とりたて詞「も」のフォーカスとスコープ」益岡隆志・野田尚史・沼田善子 (編) 『日本語の主題と取り立て』175–207. 東京: くろしお出版.
- 大庭幸男 (1998) 『英語構文研究—素性とその照合を中心に—』東京: 英宝社.
- Partee, Barbara (1991) Topic, focus and quantification. *Proceedings from SALT* 1: 257–280.
- Pollock, Jean-Yves (1989) Verb movement, universal grammar, and the structure of IP. *Linguistic Inquiry* 20: 365–424.
- Radford, Andrew (2004) *Minimalist syntax*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rizzi, Luigi (1990) *Relativized minimality*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Rizzi, Luigi (1997) The fine structure of the left periphery. In: Liliane Haegeman (ed.) *Elements of grammar*, 281–337. Dordrecht: Kluwer.
- Rooth, Mats (1985) Association with focus. Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Shudo, Sachiko (2002) *Presupposition and discourse functions of the Japanese particle mo*. New York: Routledge.
- Stalnaker, Robert (1973) Pragmatic presuppositions. In: Milton K. Munitz and Peter Unger (eds.) *Semantics and philosophy*, 197–213. New York: New York University Press.
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味 III』東京: くろしお出版.
- Tomioka, Satoshi (2007) Pragmatics of LF intervention effects: Japanese and Korean Wh-interrogatives. *Journal of Pragmatics* 39: 1570–1590.
- 外池滋生 (1989) 「「は、も、が」の論理形式—文文法と談話文法のインターフェイス」『明治学院論叢』446: 51–75. 明治学院大学.
- Vallduví, Enric (1992) The information component. Doctoral dissertation, University of Pennsylvania.

執筆者連絡先:

690-8504 島根県松江市西川津町 1060

島根大学法文学部

akiko.kobayashi.2005@soc.shimane-u.ac.jp

[受領日 2009年1月21日]

最終原稿受理日 2009年7月15日]

Abstract

Polarity and Focus Interpretation of *Toritata* Particles

AKIKO KOBAYASHI

Shimane University

This paper argues that *toritata* particles *mo* and *wa* are licensed as focus by Agree with F(ocus). Since movement is not required for focus licensing, either particle can remain in its merged position. Several researches, however, have claimed that either *mo* or *wa* should undergo obligatory focus movement. Pointing out problems with their observations, I claim that obligatory movement takes place when Agree with F is otherwise blocked by an intervener. I assume that *mo* bears a [positive], and *wa* bears a [negative] polarity feature, and that Agree between F and *mo/wa* is blocked by an intervening polarity operator of the opposite value. It explains why *mo* has to move in a negative sentence, and *wa* in a positive sentence.

The assumption of polarity features also explains scope interaction between *toritata* particles and negation (*nai*). Unlike previous analyses, I suggest that a focus phrase, which constitutes the final assertion of the sentence, should take the widest scope. It is therefore expected that either *mo* or *wa* takes scope over *nai*. The prediction apparently does not hold for *wa*, but the problem disappears once we take *wa*'s [negative] feature into consideration. What seems to be the denotation of *nai* is actually a realization of *wa*'s negative polarity meaning. *Nai* is contained in the assumption of the sentence, which means that *wa* as well as *mo* takes scope over *nai*.

The suggested analysis also explains why the above properties of *mo/wa* are absent in some subordinate clauses. Those properties are assigned to a focus, but *mo/wa* is not licensed as focus when it fails to Agree with F.